

ホッケー競技における介入指導の有効性の検討
～中学校ホッケー部を対象として～
Study of the effectiveness of the intervention guidance in hockey
～As a target junior high school hockey club～

1K10C115-8 小野田 泰良
主査 深見 英一郎 先生 副査 吉永 武史 先生

【目的】

ホッケーの魅力は何と言っても「スピード」感あふれるゲーム展開である。200km/hにも及ぶボールのスピードはもちろん、シュートチャンスに一気にゴール付近まで駆け上がる瞬発力、さらにはボール保持者がパスをするかドリブルをするか、一瞬の内にプレイ選択を判断するスピードである。本研究は、すべてのホッケー競技者に対して、このようなホッケーの醍醐味を味わわせたいと考え、中学生を対象に有効なゲーム戦術を介入指導したいと考えた。そして、介入指導を行う前後を比較し、今回、考案したゲーム戦術の有効性を検証することが本研究の目的である。

中学生にとっては、戦術についての新たな発見や、今後、新たな戦術を編み出していくための一助となり、チームワークを意識させ、チーム力を飛躍的に高める効果が期待できる。

【方法】

日本ホッケー協会が一貫指導教本として作成し、ホッケーの技術・戦術を網羅した「ホッケー指導教本(2013年)」を参考に、中学生ホッケー部の選手たちに有効な戦術(攻撃の戦術2種類、守備の戦術2種類)を考案した。ゲーム中のパフォーマンスを「サークル侵入数」「得点ゾーンへのボールの通過数」「シュート数」「ロングパスの通った回数」「ショートパスで崩した場面数」の5項目により評価した。実際に、これらの戦術を兵庫県篠山市中学校ホッケー部の部員18名を対象にして、介入指導及びアンケート調査を実施した。

チームは、A.B.Cで3チーム作り、AチームとCチームには攻撃の戦術、Bチームには守備の戦術を提供した。

【結果と考察】

表1は、ゲーム中のパフォーマンス結果を示したものである。Aチーム及びCチームは、介入なしで行ったゲームよりも攻撃の戦術を介入した後のゲームの方がパフォーマンスは向上していた。しかし、Bチームに守備の戦術を介入した以降のゲームでは、パフォーマンスが全体的に低下した。また、ゲーム全体を通して、「ショートパスで崩した場面」が殆ど0回であった。この結果は、個々の基本技術が備わっていなかったことが考えられる。

さらに、このことは攻撃に関する自由記述のアンケート結果からも裏付けられた。

一方で、Bチームとしては、守備の戦術を介入した以降のゲームでは、「得点ゾーンへのボール通過数」、「ロングパスの通った回数」を0回に抑えているものの、10回以上もサークルに侵入された。これは、相手がドリブルを多用したことが要因であったが、それに加えて1対1になった時の守備の弱さが露呈され、1対1の守備能力の向上が課題となった。

ゲームを通して、攻撃面に関しても、守備面に関しても、個々の基本技術の低さが見受けられたが、介入指導時には、提示した練習を一生懸命に実行しようという姿勢が窺えた。今回は、介入指導からゲームパフォーマンスの評価までを丸1日で行ったが、ゲーム戦術への意識を高めさせるには有効な手段であったと言える。さらに介入指導の有効性を高めるために、個々の基本技術を習得させることが第1の前提条件となるだろう。そのうえで、今回のような戦術的な介入指導を定期的に行うことに有効であると考えられる。

表1 ゲーム中のパフォーマンス結果

(攻撃の戦術を介入したAチームとCチームの結果)

	介入なし	介入攻撃	介入守備(ゾーン)	介入守備(マンツーマン)
サークル侵入	5回	8回	11回	12回
得点ゾーンへのボール通過	2回	5回	0回	0回
シュート数	2回	1回	4回	4回
ロングパスの通った回数	1回	4回	0回	0回
ショートパスで崩した場面	0回	0回	1回	0回

【今後の展望】

今後、生徒らの基本技術の向上や戦術の理解が深まるにつれて、介入指導時の練習メニューやゲーム中のパフォーマンスの評価指標もさらに検討していかなければならない。また、紅白戦だけでなく、他チームとの練習ゲームや公式戦でのゲーム中のパフォーマンスを評価し、考察を続けていくことが望ましいと考えられる。